

## 父親あるいは母親が重度視覚障害者である家庭に育つ子どもについて

—子どもの障害に対する気づきの実態と親による障害理解教育—

○平 重 忠

(板橋ナーシングホーム)

徳 田 克 己

(筑波大学心身障害学系)

### I はじめに

最近になって、障害者に関連する制度・法律が整備されてきており、また障害者理解を目的とした啓発活動が盛んに行われるようになって、徐々にではあるが、障害を持っている人にとって暮らしやすい社会になってきたと言える。そのような動きに伴って、障害を持つ人の生活も変化してきている。まだまだ不十分であるとは言え、就学や就職の機会が以前に増して確保されており、また結婚して子どもを育てている障害を持つ人も決して珍しい存在ではなくなっている。

父親や母親が障害を持っても、家庭生活や育児が特別なものになるわけではない。本質的には、人間の営みとして、その喜びや苦労は障害の有無にかかわらず同じである。しかし、世間には、障害を持つ父親や母親に育てられている子どもたち（健常児）に対して、ステレオタイプの見方が存在していることも否定できない。例えば、子どもが家庭でごく普通の役割をしていても「〇〇ちゃん、えらいわねえ、いつもお手伝いして」と周囲の大人から言われ続け、子どもがほめられて当然のような気持ちになって困っているなどのことをよく耳にする。また女の子が生まれた際に、まわりの人から「よかったですね、大きくなったらお母さんは面倒を見てもらえますね」と言われ、「生まれた喜びよりも、私はそのように世間から見られているのかと、つらくて悔しい思いがした」と語る母親もいる。

本報告では、障害を持っている親と生活している子どもの障害に対する気づきや家庭における障害理解教育の実態についての資料を得るために実施した「母親あるいは父親が重度の視覚障害者（点字使用者）であり、パートナーが活字使用者である家庭」を対象とした聞き取り調査の結果をまとめた。そこから、我々一人ひとりが、そのような家族と同じ町に住む地域住民として、またそのような家庭の子どもの教育者・保育者として、どのような配慮をすればよいかということについて考察してみたい。

### II 方法

1. 調査対象者：父親が重度視覚障害者である家庭1ケースと母親が重度視覚障害者である家庭3ケースを調査対象とした。どのケースもパートナーは活字使用者であった。対象者は本研究の代表研究者の知人であった。詳細を以下に示す。

ケースA：母親が視覚障害者、5歳女兒。

ケースB：母親が視覚障害者、8歳女兒。

ケースC：母親が視覚障害者、9歳男児、7歳男児。

ケースD：父親が視覚障害者、8歳男児。

2. 手続き：視覚障害者に対する電話による聞き取り調査を行った。電話のやり取りはすべて録音した。

3. 質問項目：以下の5項目を尋ねた。

①親の障害に対して子どもが初めて反応を示したのはいつか。どのような反応か。親はそれにどのように答えたか。

②父親（あるいは母親）は、パートナーの障害について子どもにどのように話しているか。また、それに対して子どもの反応はどうか。

③子どもの友達から親の視覚障害のことにについて尋ねられたり、不思議がられたりすることがあるであろうがそれについてどのように話しているか。

④親が視覚障害を持っていることについて、近所、親戚幼稚園・保育所の先生や保護者たちは、どのように子どもに話しているか。それに関して、困ること、あるいは迷惑なことはないか。また、子どもはどのように反応しているか。

⑤親が視覚障害を持っていることで、子どもの精神面の発達や成長に影響がある点はどこか。ポジティブな面とネガティブな面の両面から答えてほしい。

### III 結果

ここでは各ケースの回答を質問項目ごとに記述していきたい。ケースAでは、初めて母親の障害に気づいたのは2歳の頃であった。暗眼者である父親と視覚障害者である母親の行動の違いに疑問を持ったようである。具体的には、物を拾う時「パパはすぐ拾うけれどママは遅いね」という反応であった。それに対して両親は、母親を特別に見るのではなく、父親と同じように接することを教えている。決して『母親は目が見えないから』ということとは子どもには言っていない。ケースBでは、やはり2歳頃に母親の障害に気づいたようであり、具体的には母親には物は手渡さないとわかってもらえないことで理解したようである。このケースでは一貫して『見えない』ことの意味を教えている。4歳の時に「お母さんはどうして目が見えなくなったのか」という質問があり、母親が自分の病歴を説明している。ケースCでは上の子どもは1歳半頃、下の子どもは2歳すぎ頃気づいたようであると回答しており「どうして見えなくなったの」という質問が母親になされている。ケースDでは2～3歳の

頃に気づいたようであるが、具体的なことは記憶にないと回答している。

次に、パートナーは子どもに障害を持つ母親（父親）のことをどのように伝えているかであるが、ケースAでは、生活の上でのさまざまなことを具体的に示したとしている（例えば母親に物を渡す時は直接手にふれるように渡すなど）。子どもはそれについて、素直に学んでいったようである。ケースBでは、「人間にはいろいろな人がいて、お母さんは初めから目が見えないように生まれついたから、あなたもお母さんが目が見えないということを考えて行動しなさい。もし他の目が見えない人に会った時は……」と言葉によって教えている。また父親が、視覚障害者である母親に対して、具体的に、例えば物の渡し方やその他の配慮を子どもの目の前でやって見せて教えることも多かった。子どもは特に意識することなく、自然にそれらの方法を身につけていったようである。それは時々母親の友人である視覚障害者が家に訪ねてきたり、また外で同席したりした際に、子どもが自然に配慮した対応をしていることから確認できる。ケースCでは、基本的には父親は『お母さんは目が見えないのだからいろいろなことを手伝ってあげよう』という説明をしている。5歳の時、子どもが「お母さんはどうして病気になったの」という質問をした際に、目の構造の絵を見せながら母親の目の状態を説明したことがあるが、上の子どもが「僕がお医者さんになって直してあげる」と言ったことが印象深いと母親は答えている。下の子どもは「も、お母さんは見えないんだから」と言いながらよく手伝いをする。ケースDでは、『お父さんは目が見えない』ということを手引きの仕方などの具体例を通して教えている。子どもは自然に受け入れているようである。

次に、子どもの友達から親の視覚障害のことにについて尋ねられたり、不思議がられたりすることがあるかに関して、ケースAでは、子どもの友達に白杖のことを頻繁に尋ねられるようである。その際には「白杖を持っていることで他の人に注意してもらえ」ことなどを話している。ケースBでは「なぜ見えないのか」という質問に、自分の子どもに対してと同様に丁寧に言葉で説明しているとしている。ケースCでは、母親が盲導犬を使用しているために、盲導犬に関する質問を頻繁に受けるようである。母親が盲導犬の内容を答えるとともに、子どもが「お母さんは目が見えないから犬が必要なんだ」と友達に答えている。また「目が見えないのにどうして目を開けているの」という質問を受け、子どもの疑問の素朴さに驚いたとしている。子どものこのようないわゆる素朴な疑問に答えていくことは、その子

ものの障害に関するファミリーアリティを高め、障害の適切な認識を形成する第一歩となると思われる。ケースDでは、「どうして△△ちゃんのお父さんは白い杖を持っているのか」という質問を時々受けるとしている。「おじさんは目が見えないからこの杖をついて歩いているんだよ」と答えるようにしているが、自分の子どもはそれをそれまで意識もせず当たり前のように受け入れていたが、友達からそのような質問があって初めて自分でも意識したところがあるようだ」と回答している。

「親が視覚障害を持っていることについて、近所、親戚、幼稚園・保育所の先生や保護者たちは、どのように子どもに話しているか。それに関して、困ることなどはないか」に関しては、我々関係者がさらに配慮しなければならないと反省すべき結果が示された。ケースAでは困ることが多いとし、特に子どもと一緒に買い物に行った先で「お手伝いしてえらい子ねえ」とほめられることがたいへん多いとしている。子どもは「自分が全部しているわけでもないのに」と戸惑っている。ケースBでは近所の人などにほめられることが多く、母親はほめられた直後に、子どもに対して「あなたは家族として普通のことをしているだけなんだ」ということを教えているとしている。最近では子どももそのことを理解している。ただし母親以外の視覚障害者に配慮した対応ができた場合にはほめていると回答している。ケースCでは、周囲の大人が子どもに「お母さんを助けてあげなさい」「お手伝いしてえらいわね」などと言われるのが非常に困るため、上の子どもが生後10か月の時に、視覚障害者の自立のシンボルとして世間では認識されている（しかしそれは誤った認識であるが）盲導犬を入手している。盲導犬歩行をすることによって、子どもと手をつないで歩いても、子どもに手を引かれていて周囲は感じるものがなく「子どもに対する過度の賞賛の被害」が最小限に抑えられていると思われる。ケースDにおいても「お父さんを連れて歩いてえらいね」と言われることが多く、子どもに聞き流すように注意してきたが、最近スーパーに行く際に子どもの側に「連れて行っている」という意識があるようで、残念であるとしている。

「親が視覚障害を持っていることで、子どもの精神面の発達や成長に影響がある点はどこか」について、ケースAでは、よく気のつく子どもになる、言語的説明が上手になる、ケースBでは、世の中にはいろいろな人がいてそれが当然であるということがわかる、ケースCでは母親が手取り足取りの世話をしないことで子どもたちの自立が早くなる、状況がわからないので兄弟げんかには全くタッチしないようにしたら兄弟仲が非常によかった、などのいい面を挙げる対象者が多かった。これらのことは一般のしつけを考える上での示唆に富む内容である。ネガティブな面としてはボール遊びなどにつき合っ